

## 「P F の運営について」セッションの報告

P F 懇談会会長

雨宮慶幸（東大院・新領域・物質系専攻）

ここ数年恒例になった「P F の運営について」のセッションが、P F シンポの最後の時間帯に1時間半にわたって行われた。今年は、木村所長と松下副所長のお二人からそれぞれ問題提起をして頂いた。

まず、松下副所長からは「極紫外・軟X線高輝度計画とP F の関係について」、  
「V U V ・ S X リングの計画が all Japan で立案されているが、これが実現された場合、P F の V U V ・ S X の activity はどのようにあるべきか、P F ユーザーの立場で議論していただきたい」との趣旨で問題提起がなされた。この問題提起は今年1月に行われた放射光学会主催の合同シンポの時にもなされたものであり、それを継続した形で議論が行われた。小林光源系主幹からは1月以降のこの計画の進捗状況についての詳しい説明があった。リングの主なパラメータは、周長：約250m、セル数：12～16、挿入光源数：10～14、ビームエネルギー：1.6～1.8 GeV、電流：300mA、エミッタンス：6 nmrad。さらに、柳下教授（P F）から上記のパラメータはどのような利用実験を行うかの議論をふまえて決定されたものであるとの背景説明が行われた。次にこの問題提起に関連したアンケート項目の結果が朝倉利用幹事から報告された。「V U V ・ S X の activity は徐々に高輝度リングに移行すべし」という考えと、「高輝度リング実現後もP F ではV U V ・ S X の activity を現状通り保つべし」との考えが、二分した結果であった。しかし、直線部増強計画に関しては、計画を練り直し、ミニポールを中心にしたX線領域の計画にシフトすることに賛成する意見が過半数を占めた。ただ、アンケートの回収率はその時点では必ずしも高くなかったので、意見分布の一応の目安として考えるべきかも知れない。アンケート結果の詳細は本報告書の別項を参照いただきたい。どのタイミングで、どのサイトに、と言うパラメータが決まっていないこと、また、そのリングが運転された場合のP F 予算に与える影響が不透明であること等から、議論の内容があまり具体的に行えない感が無きにしもあらずであった。しかし、今後P F の進むべき方向を決定する上で重要な議論であり、V U V ・ S X リングが早晩実現するであろうことを視野に入れて、引き続き議論を行っていく必要があると強く感じた。

次に木村所長からは、「物質構造科学研究所の将来について」という題目で、現在物構研が置かれている状況についての説明があった。まず、共同利用機構の法人化の問題が取り上げられた。現在、大学共同利用機関がまとまって一法人を作る案が浮上ってきており、KEKとしてはこの案には賛成できないことを表明していることが報告された。研究内容が全く異なる機関が一つにまとまることの運営面での非効率さ、が主な反対の理由である。また、「共同利用」の重要性が法人化と関連して軽視される傾向にあることが、放射光のコミュニティーにとって重大な問題であるとの認識が示された。すなわち、法人になると、全て法人自身が責任を持って事業を展開することになり、他の機関に所属するユーザーのために働くことが法人としてどう評価されるか、という問題が出てくる。PAC さえ通れば、旅費なり研究費なりが機関外の者のために使われているのはおかしいと云う議論、全て利用者が科研費を取ってそれで研究すべしと云う意見があるとのことであった。KEKはそのような運営はなじまないと反対意見を表明しているが、これに対してPACを通った者だけ科研費を出すようにしたらどうか、との意見もある由である。現にSpring-8でも大幅に旅費が削られているとのことであった。これに関して、共同利用研として研究成果、研究内容の広報活動が今までにも増して大切であるとの意見が出された。

また、物質構造科学研究所の問題としては、中性子・中間子の施設が東海村に移ることが決まっており、その後つくばキャンパスで何をやっていくか、との議論が所内にWGを作って検討が始まった、との報告があった。また、第三世代のVUV・SXリングができれば、第三世代のリングがそれ以上日本で認められる可能性は極めて低いこと、PFリングの運転経費にも影響があること等を念頭に入れて将来計画を立案して行くことが必要であるとの認識が示された。

最後に、ユーザーグループからの報告として、XAFSユーザーグループでは、化学反応 in-situ XAFS ビームラインの建設を外部資金を獲得して建設することを検討しているとの報告があった。

1時間半という限られた時間の中ではあったが、何が検討すべき重要懸案かという問題意識をスタッフとユーザーが共有する上で貴重な機会であった。